

どれみなのはなし

そのいち



きんどんてい にゃんこう
金井亭 猫好

もくじ

まえがき

あつたかいくつき 3
あつたかいくつきのこと 8
素朴な疑問 9
素朴な疑問のこと 17
あとがき 18

イラストレーション……久遠くど一海かずみ

はじめまして ですよ。

「ごひいきにされている方、ごめんなさい。先に謝っちゃいます。この本はTVアニメ『おジャ魔女どれみ』の本なのです。」

酒処 金井亭として創作以外の本を出すのは初めてでして、いつもとは勝手が違います。とりあえず、『恥ずかしい話が苦手な方』はいますぐ本を閉じることをお勧めいたします。

なお、私は仕事の都合でパトレイヌ以後の話は見えていません。設定に矛盾がありましても、あまりいじめないでくださいな。

では『どれみはなし』そのいち、どうぞご覧くださいませ。

酒処 金井亭 亭主

金井亭 猫好 敬白

あつたかいくうき

4年2組の教室はきょうも平和。

ホームルームが終わったあとは、いつもの通りのおしゃべりタイム。でも、わたしはなんかその気になれなかった。

きょうはお仕事もないから、ママがむかえに来ることもない。だけど急いで帰る、っていう気分でもないし。だから、わたしは席にすわったまま、なんとなく窓のそとをぼおつ、とながめていた。

「あれ、おんぶちゃんどうしたの？きょうはお仕事ないんだっけ？」

目の前におだんごがふたつ飛び出してきた。もちろん、どれみちゃんだ。

「え？あ、うん」

そっか。あたりまえだわ。教室にのこってたら、みんなが声かけてくるんだっけ。

「おんぶちゃん、きょうちょっと変ね。なにかあったの？」

大きな丸メガネ。心配そうなはづきちゃんの顔。

そうよね、ここでゆっくりできるわけないじゃない。

わたしは軽く息をすってから、にっこりと笑顔をふくつてみせた。

「ううん、別に。なんでもないわよ」

笑顔でいられるうちに、わたしは机のなかのものをカバンにつめこんで、そのまま立ち上がった。

「あ、おんぶちゃん待ってよ。MAHO堂行くならいつしよに」

MAHO堂かあ。ハナちゃんに会うのはいいんだけど

そんなことをぼんやり考えながら、わたしが教室の扉をあけたちょうどそのとき、うしろから元気な声がひびいてきた。

「おんぶちゃんおまちどうさん。いや〜ごめんな、遅うなって」

振り返ったあたしの肩を、あいちゃんがぼんぼんとたたいていた。

「おまちどうさま、って あいちゃん、おんぶちゃんと約束してたの？」

「そや、どれみちゃん、はづきちゃん。悪いけど、あたしおんぶちゃんと行くことあつてん」

「ええっ……」

どれみちゃんの目がかがやいている。そんなこと、わたしに聞かれてもこまるんだけど

って、口を開こうとしたところにあいちゃんが割りこんできた。

「ないしょやて。へへ、うらやましやろ〜」

「へ、別にうらやましくなんかないよ〜だ」

口ではそう言うけど、ぶっくりぶくらませたほうへは、『うらやまし』って言っている。おもいっけい。

「それじゃ、私たちはMAHO室に行っているから

さ、どれみちゃん、行きましよ」

そう言いながら、はづきちゃんがどれみちゃんの

うでを引っぱって行った。肩にはいつのまにか、ふたり分のランドセルを持つてる。

「あたしらも時間あつたらあとで行くよつて。ほなおんぶちゃん、そろそろ行くか」

わたしもあいちゃんに引っぱられるまま、歩いていった。まあ、いいか。このまま教室にいるより、うるさくなさそうだし。

教室を出ていくとき、はづきちゃんがウィンクしているのがちらつと見えた。あいちゃんのが笑いしながら、顔の前で手を合わせてる。『ごめん！』っていつみたいに。

わたしはそれを見ながら、夜になったら八ナちゃんの話をしてあげよう、と思った。みんなが帰ったらね。

「で、なんで屋上なの？」

あいちゃんに引っぱられて、ついたところは屋上のとびら。

よいしょっ、ととびらを開けたあいちゃんは、給水塔のうらっかわへ歩いてく。わたしがついてきてるのを横目でちらっ、と見てから、

「あたしな、こないだ空から学校見て、ええ場所見つけたんや」

そう言っつてパイプのすき間に入っつていった。「せまいから氣いつけてな」なんて言葉を受けながら、わたしもそれについていっつてみた。

誰かつれて来たかったのかな？

わたしだけさそう、つていうのはわかるような氣もする。言っつたらかわいそうだけど、こんなせまいところ、はつきちゃんはさそいにくいし

「入り口からは見えにくいんやけど、このおくがけっこ広おて ほあら!!」

せまい道をやっつと抜けたら、目の前がなかった。

へえ、屋根の上に出ちゃうんだ。

「そんでな」

あいちゃん、あんまりかたむいてない屋根にころん、と転がっつて

「こうすると、ほら、目のまえげんぶ空なんや」
言われてわたしも転がっつてみた。ほんとだ。大きなそら。わたがしみたいな大きなくもが、目の前をゆっくり歩いていく。

あいちゃんはこれが見せたかったのかしら？

小さなくもがちぎれてくのほあつ、とながめてたら、

「かんにんなー、おんぶちゃん」

「え？」

いきなりそう言われて、わたしはちよつとびっくりした。

「わかつてる思っつけど、どれみちゃんもはつきちゃんも、おんぶちゃんのこと本当に心配してゐるねん」

「なんだ。やっぱりただ元気づけようとしてただけなんだ。」

あたしはちよつとがっかりした。あいちゃんならわかってくれそうな気がしてたのに

でも、それからあいちゃんはずっと、何も話さなかった。

そらを見ながら、ぼーっとしてた。

わたしはわけがわからなくて、つい聞いてみた。

「なにもしゃべらないの?」

そしたら、あいちゃんがぼつん、と言った。

「大親友かて、言いたないことあるやん」

「!?!」

わたしは思わず起き上がって、あいちゃんの顔のぞき込んだ。でもその目はさっきと同じ、くもの方をぼあつ、と見てるだけだった。

「せやけど、だれかとなりについて欲しいやん」

「」

目の前が、すこしだけぼんやりかすんできた。わたしはまた横になって、あいちゃんに見えないように目のあたりをふき取ってから、大きく息をすった。

「それって、くうきみたいね?」

「くうきでええねん。あたしがそんな、ベタベタしたら気持ちわるいやんか」

あいちゃんのほっぺがちよつと赤いのは、あつたかいお日さまのせいじゃない。きつと。

「ふあ　　なんやぼかぼかして、ほんととねむたなつてきてん」

あいちゃんはまるくなりながら、わたしに半分せなか向けた。

「おんぶちゃん——?」

「うん?」

ちいさくて、でもとってもあつたかそつなせなかに、わたしはうなづいた。

7 あったかいくうき

「あしたは、笑おな」

「うん」

あとは、ゆつくりとした息の音が聞こえるだけ。

わたしはなんとなくその音にあわせて息をしてみ
た。 一つのまにか、体がらくになっていった。

「おつはよー！」

朝の教室はあいさつでいっぱい。

「みんな、おはよつ」

わたしは席にカバンを置きながら、どれみちゃん
たちにあいさつした。

「おんぷちゃん、きょうは元気みたいね」

はづきちちゃんが笑顔で声をかけてきた。

「え？うん。心配させちゃってごめんね」

「そうそう、おんぷちゃん。昨日あいちゃんどこに
行ったの？ あいちゃんは、ぜんぜん教えてく

れないしき、きょうになったらおんぷちゃん元気に
なってるし あ、ひよっとして、何か食べに行っ
てたとか??」

いまにもだれをたらしちゃいそうな、どれみちゃ
んの顔。わたしは思わず笑いながら、軽く首をふつた。

「うっん。ただ、くつきを思いつきすっただけよ」

「え!？」

きよとん、としているふたりを見ながら、わたしは
こっそり口に出してみた。

「あったかい くうきだよね」

あったかいくうき のこと

あ~~~~っ 恥ずいっ!

いや~、もうなんて恥ずかしいもの書いてるんでしょおね、このおっさんは(^_^;))

妄想を文章にし始めたときは書ききれぬかどうか心配でしたが、昭和の少女漫画で育ってきたこの身は伊達じゃなかったようです。...あまり威張れたものではありませんケド。

この起こりは、PlayStationのゲームでした(MAHO堂ダンスカーニバル)。ゲーム内容は...まあ小学校低学年むけですからたいしたことはないのですが、中のミニミニドラマ(第6話『おいしいこやきめしあがれ』)の後半に、あいちゃんが他の三人から

「はい、あ~ん」

って食べさせてもらっているシーンがありまして、あいちゃんファンの私やもう思わず体のかゆいトドのごとくその場でごろごろと...いえあの(^_^;;;)それからしばらくの間、色々なシチュエーションがはっきりなしに頭に浮ぶ妄想大爆発モードに突入。その中でもいちばんましな妄想がこの話なわけです。

...え、他の^{はなし}妄想はどんなだっけ?...とりあえず^{やばいこと}18禁にはなつてませんから安心して下さいな。

素朴な疑問

近衛隊長の任に着いて、いったい何年が経つたのだらうか――

魔女王城の夜。女王さまの部屋の周りをぐるりと見回りながら、私はふとそんなことを考えていた。

おかしな話だ。感慨に浸るなど私の性に合わないはずなのに、いつの頃からか、余計なことを考えるようになってしまった。

いつ？　そういえば、あの子供たちが来たころから、か。

「本日の謁見は終了しております。できましたら明日再度来られますよう。」

「すぐにお会いしたいんだよ。どいとくれ。」

ん？　正面の門のあたりが騒がしい。この夜中に何事だらうか？

私は帽子をかぶりなおすと、物思いを振り切って

門へ急いだ。

「どうした、お前たち。」

門の前では、深夜勤務の門番二人が困った顔をしていたが、私の顔を見るなり縋るような目で訴えてきた。

「あ、マジヨリンさま。あの　マジヨハートさまが女王さまにぜひお会いしたいとおいでになっているのですが。」

なるほど。相手が宮廷魔女医師では無下にもできないだらう。門番も災難だ。

「マジヨハートどの、門番を困らせるのはやめて頂きたい。女王さまの謁見時間はご存じのはず。今夜はお引き取りを。」

かわりに明日、一番にお会いできるよう手配させて頂く。それでよいでしょうか？

私はため息混じりに言った。こういう場合は、自分の非常識さをちゃんと認識させれば落ち着くものだから

「それじゃ遅いんだよ！そこいといとくれ!!」

普通は落ち着くもののだが。

私は少しばかりムツとしたが、相手は宮廷魔女医師だ。問答無用というわけにもいかない。

「なりません。無理強いされるようなら、いかに宮廷魔女医師と言えども容赦するわけには参りません」

少し口調が厳しくなりすぎたか、と思ったが私も女王さまを護るのが役目。後へは引けない。

口唇をぎゅっと閉ざした魔女医師の、次の出方を伺っている。

「おやめなさいー!」

凜とした声が、夜の玄関に響き渡る。

廊下の角から現れたのは、夜着にガウン姿の女王さまだった。

「は、女王さま、これは」

「マジヨリン。役目ですから責めはしません、魔女医師としてのマジョハートはいつでもわたくしに会う権利があります。」

謁見の間にお通しなさい」

私は内心、矛を収めるきつかけができてほっとした。

「は。では、こちらへ」

「行き方くらいわかってるよ」

彼女は星模様の赤い頭巾をほんぽん、とはたいて歩き出す。思わず歯噛みした私の肩に、そっと細い指が置かれた。

「マジョハート。マジヨリンにも立場というものがあります」

魔女医師は靴音高くその場に止まると、直す必要のない頭巾を怠々しげにいじりながら、私に向きなおってほそっとこぼした。

「ふん　じゃあ案内を　たのもうかね」

「こちらへおかけ下さい」

謁見の間。特別に用意した椅子に彼女は腰かけた。

「ありがとうよ。 さつきは悪かったね、ちよつと取り乱しちまって」

「いえ、お互い役目ですから」

静かにはなつたものの、やはりいつものマジヨハートとは違つ。椅子に座つた後の彼女は、じつと考え込むかのように目を閉じたままだ。

しばらくして、彼女はおもむろに口を開いた。

「あたしはね、その役目を辞めに来たんだよ」

「なんだつて!？」

私は彼女の顔を覗き込むようにしてみた。けれど魔女医師は、閉じた瞳を明けようとはしなかった。

「きょう、健康診断があつたのは知つてるだろ。あの人間の子供たちが合格しなかつたのも」

「ああ、私はうなずいた。」

私自身は赤子を育てたことなどないが、マジヨハートの健診がかなり厳しいものだとはよく聞いている。子供たちが まして人間が合格しなかつたくらい、

いまさら驚くことではない。

「そう、たしかに合格しなかつたさ。なにせあの子供たちときたら——」

ハナの鼻水を拭き取るために制限時間をオーバーするわ、おばけに脅えるハナを抱えて森から全力で逃げ出すわ、鳥のヒナを母親に会わせようと散歩の道を逆行するわ、あげくの果てにはハナが疲れるからといって川べりで休んでリタイヤするわ、

ダンッ!!

肘掛ひじかけに打ちつけられた彼女のこぶしは白く、微かすかに震ふるえていた。

「どこが悪いっていうんだい!? 母親として、一つだつて間違つたことなんかしてないじゃないか!」

私は息をのんだ。

「八太郎夫婦の言葉に助けられたのはあの子供たちじゃない。あたしの方さ」

八太郎夫妻がかばつた話は私も聞いている。口さが

ない魔女たちの間では、タコの手は多いから何度失敗しても救ってもらえる、などと笑いものになっていたが、まさかそんなことがあったとは。しかし

「たった それだけで、辞職すると？」

私には信じられなかった。職務こそ違つけれど、自分の職に誇りと情熱をもってあたっていた彼女は、私の目指すべき魔女だから。

その思いが、彼女にもわかつたらしい。私の目をじつと見て、こう言った。

「あの瞬間からね、あたしは自分に疑問が沸いたんだよ。あたしは今まで、どれだけの間違いをししてきたんだろう、つてね。

いや、それどころじゃない。これからどれだけの間違いをするんだろうかね。そう思つたら、もういてもたつてもいらなくなつたのさ」

「し、しかし、ハナの検診が」

私は慌あわてて言葉をつむいだ。なにか言わねばならぬ。そんな気持ちだけが頭を駆け巡っていた。だが、

「ああ。あの子たちの診断は、魔女の常識を一度外したほうがいいのさ。あたしなんかよりもっと若くて、考えの固まってないのを探してきたがいい」

もう次の言葉は出てこなかった。

「遅れてすみませんでしたね。マジョハート」

私ははつとした。マジョハートどの言葉に圧おされて、女王さまのお出ましに気付かないとは、なんと迂闊うかつな！

「じよ、女王さまの」

到着を告げる一声を女王さまがおさえた。

「深夜ですよマジョリン。略礼で構いません。

マジョハート、話は聞きました。謁見の内容はそれですべてですか？」

「はい」

低く、固い声が、謁見の間に響き渡る。

「わかりました。マジヨリン、マジヨハートを解任します。書類をお持ちなさい」

私は一歩前に出た。不敬は承知している。けれども言わねばならない。職分を越えてでも、私は

「女王さま、しかし」

「早く書類を」

静かだけれども、なにもかもを圧する一言。わたしはただ黙って、規定の書類を持ってくるしかなかった。

さらさらと、女王さまの手が文字を産み出して行く。無骨なわたしや熟練したマジヨハートさまとは違う、たおやかに流れるような動きは、わたしには望んでも得られないもののひとつだ。

けれど今その手が産み出しているのは、マジヨハートの解任状なのだ

「ではマジヨハート、本日ただいまを持って、宮廷魔女医師の任を解きます。よろしいですね？」

女王さまの声はいつもと変わりなかった。私はなぜか、それがとても悲しかった。

「ありがとうございます。では、失礼を」
腰を上げた魔女医師は、ずいぶん歳をとってしまったように見えた。

「どこへ行くのです、マジヨハート？ まだ終わっていませんよ」

「は？」

驚いたのは私だけではなかった。あとから考える^{まぬ}と間抜けだが、私たち二人とも半ば振り返った状態^{なか}で止まってしまっていた。

「これから就任式です。医師マジヨハート、あなたを新しい宮廷魔女医師に任命します」

「なんだって!？」

「じよ、女王さま？」

玉座の前に駆け寄った彼女は膝をつくことも忘れていた。残念ながら私も人のことは言えない。

女王さまは私たち二人を交互に眺めてから、ゆっくりと仰せになった。

「自分の間違いをまっすぐ見つめるあなたを、わたしは信じます。」

「悩んだらいつでも辞めにいらっしやい。あなたがいつも赤ちゃんを一番に考える医師であるかぎり、わたしは何度でも任命してあげます。」

「どれみちゃんたちといっしょに、成長しましょう。わたしも——」

しん、とした。私はあっけにとられていたし、マジョハートは下を向いて黙っている。

ふふ

たった三人だけの越権の部屋に、ふとかすかな音が響いた。

くっ、くっく

音はだんだん大きくなる。同時に目の前の頭巾が

震えはじめた。

震えはだんだんと大きくなり、ついに肩まで達したとたん、がばつと上げられた顔から、大音響が響き渡った。

あはははは！ あっははは！

「マ、マジョハート——！」

女王さまの御前で大口を開けて笑い続ける彼女に、私はそれ以上言葉が出なかった。

すぐに気をとりなおして無礼を咎めようとした私を、たおやかな右手の一振りがおしとどめる。

「はは、そういうことかい。あんたがあの子供たちを気にかける理由がやっとわかったよ。」

——いいさ、だったらあたしも付き合ってやろうじゃないか。とことんね」

ヴェールの影で女王さまはにっこりと笑っていた。新しい宮廷魔女医師に、それから 私にも。

私は口の中で笑いを噛み殺した。そうでもしなけ

れば彼女のように笑いだしてしまいそうだった。いつか、この笑いが堪えられなくなる日が来る。そんな予感がした。

「どうだい？」

マジョハートの診療室では、魔女医師がペンを走らせていた。静かな部屋に、カリカリ、というペンの音が軽く響く。

「はい、ほとんどの赤ちゃんがハイハイできてます」

「あ、アタリメコちゃんがちょっと遅いですねえ」

答えたのは看護婦姿の若い二人。一日中この姿というのは職務に忠実と言えなくもないが、私の見るところ趣味の部分の方が大きいように思う。

「ん？全然だめなのかい？」

顔を上げた医師の額に縦皺が寄る。それでもペンの音が止まらないのはさすがと言つべきか。

「いえ、遅いだけです」

彼女はその呑気な言葉に目だけで呆れていた。

「まあタコ一族とイカー族の赤ちゃんだからね。先に泳ぎを覚えるのが当たり前だろうよ」

「そうそう、泳ぎはすつこく上手みたいですよ」

「さすがです」

「そうかい。じゃ、プールも用意しておいたほうがいいかね。あとは」

響き続けていたペンの音が、この瞬間びたり、と止まった。

「ハナはどうだ？」

看護婦二人は顔を見合わせて、

「さあ」

「人間界のことまでわかりませんよあ」

ふう、とため息をつくマジョハートの姿からわざと目を逸らしながら、私は扉を開けつつ声をかけた。

「ハナなら数日前にハイハイをはじめた、とテラが言っていたが」

「？マジョリンか」

視線が集まるのを感じたが、私はあえてだれとも目を合わせなかった。

「余計だったか？」

「いや」と言いながら彼女はあごに手をあてて

「数日前、か」

また額に皺を寄せる。私は自然に緩みそうになる口元を無理に引き締めた。

「テラが言うには、家中あちこち歩き回って、あの子供たちも追いかけるのに苦労したらしいが」

瞬間、彼女はにやつと笑った。自信たつぷりの顔にいたずらっぽい瞳。これこそ私が目標とすべきマジョハートだ。

「それじゃ健診は予定通り、次の日曜だ。さあ、準備にかかるよ！」

素朴な疑問 のこと

どれみ#になってからの一番のお気に入り、なんと言ってもマジョハートさまです。

この方を最初に見たとき、思わず口からこぼれたのが「この人マリラだあ」。赤毛のアンを引き取ったマリラ・カスバートにそっくり、というのが第一印象でした。

おジャ魔女たちを見守りながら、逆に自分が成長してゆく、まさにマリラそのものの姿を、女王さまは望んでるのじゃないかな?などと考えながら科白^{セリフ}を選んでみましたが、はたして成功しているでしょうか?こればかりは読んでいるあなたにしかわかりません。ドキドキものです。

ちなみに、表紙イラストの参考用に、と姉にビデオを見せたときの感想は「ドクトリーヌ(©ONE PIECE)の若いころ、ってイメージでいいの?」でした。なるほど...たしかにそのまんまですな(実年齢はともかく(^_^;))

さて、読まれた方はお気づきのとおり、この話はマジョリンの視点で書いています。私のマジョリンに対するイメージは『職務に忠実な武官』でして、この人の口調は私にはとってても考えやすかったです。

でもどれみワールドですから、ほんとうは侍従長とか、メイド長なのかもしれませんね。...彼女のメイド服姿はちょっと想像がつきませんケド(^_^;)

あとがき

目の前に、人形が3体あります。

『しゃーぷっぷフレンズ』のあいちゃん、おんぷちゃん、ぽっぷちゃんです。マジョハート人形がないのが惜しいところです。

さらにその脇には、人形用のティーパーティセットがあります。

なんでこんなにハマるかな～と自嘲的に笑いつつ、それでもやめられないのは『おジャ魔女どれみ』という番組が、キャラクターだけでなく物語としても、とっても魅力的だからでしょう。

この『どれみはなし』は、文章くらいでしか想いを表現できない一人のおっさんの愛情のかたまりなのです。ちょっと歪^{ゆが}んでしまったかもしれませんが、わずかでも伝わりましたら幸いです。

...さて、刊行^だしてしまったものはしかたありません。表紙をお願いしている姉も「かわいい女の子だったら描いてもいいよ」と言ってくれてますし(悪かったな、いつもは竜ばかりで(-_-;))、ネタがたまりましたらまた机の上が恥ずかしくなることもあるでしょう。もしこの本を気に入ってくださるような奇特な方がおいででしたら、どうぞ気長にお待ちくださいませ。

では最後に、この本を手にした(手にしてしまう方も含めて)すべての方に感謝の意を表しつつ、この拙文を終わらせていただきます。

この本に関するお問い合わせは、奥付の住所、または電子メールにてお願い致します。

e-mail nyankoh@eastmail.com

ハンドルは、“猫好. K” もしくは“金井亭 猫好”です。

また、細々とながら情報ページを作っております。

酒処金井亭 うえぶ店

<http://sake.st/nyankoh/>

お目に止まりましたら、よろしくお願ひいたします。

追記：私の書く文は、基本的にコピーフリーです。コピーしたいなんていう奇特な方は、以下の三つの条件を守っていただければ、いくらでもして頂いて構いません。

1. 表紙を含む、すべての頁をコピーすること。
2. 表表紙から裏表紙までを一セットとし、各頁を分離したり、新たな頁を加えたりしないこと。
3. コピーに際して必要な、最小限の費用を越える金銭授受を伴わないこと。

奥付

発行 酒処 金井亭

発行日 2000年12月30日

連絡先